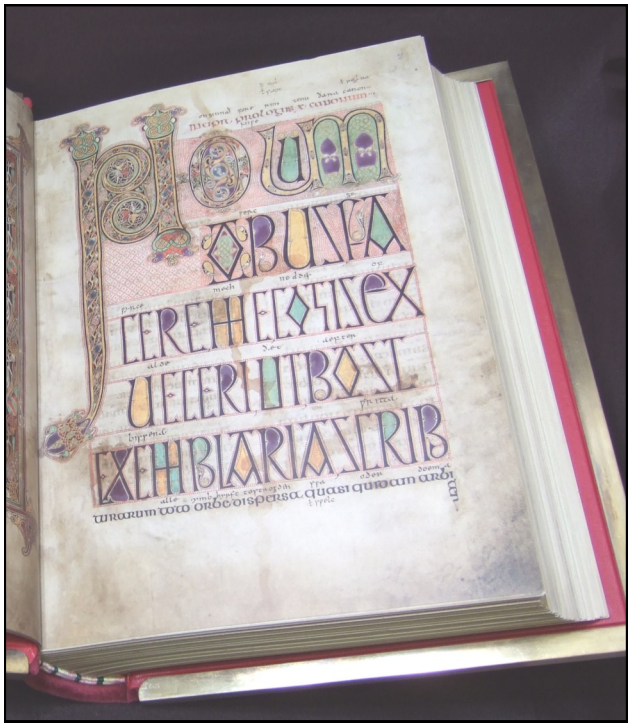
展示
リンディスファーン福音書〈ファクシミリ版〉

The Lindisfarne Gospels

『リンディスファーンの福音書』(The Lindisfarne Gospels)は、698年頃にリンディスファーン主教であったイードフリスにより筆写、装飾が施された、ラテン語福音書装飾写本である。中世初期ケルト系修道院文化の精華である、いわゆる三大写本(他2つは『ダロウの書』『ケルズの書』)の一つである。現在、本体はロンドンの大英図書館に所蔵されており、アングロサクソン様式とケルト様式が融合したケルト・キリスト教の最高点を示している。写本はほぼ完全な形で保存されており、『ヒベルノサクソンアート』と呼ばれる独自の芸術表現の貴重なタイプカプセルでもある。立教大学は言うまでもなく、聖公会によって建てられた大学であるが、聖公会神学(アングリカニズム)の最大の特質である、ローマ型キリスト教とケルト・キリスト教の総合を、シンボリカルに表現する『リンディスファーンの福音書』を、ぜひ深く味わっていただきたい。

(西原　廉太　文学部キリスト教学科教授)

The Lindisfarne Gospels



聖ヒエロニュムスのダマススの教皇に宛てた手紙

聖ヒエロニュムスは4世紀末にダマススの教皇の命を受けて、それまで世界各地に散らばっていた古い聖書のいろいろな版を統一して、新たにウルガタ訳聖書を編纂した。

（訳）

古いものからあたらしい作品を作るように、わたしにお求めになりました。それは世界中に、ほとんど恣意的に、散らばっている聖書の写本を(価値判断して)…

聖マタイの肖像画

聖マタイはベンチに腰かけ、膝の上に本を開げて文字を書いている。頭上には彼のシンボルである人の姿（光輪と翼を持つ）が描かれ、トランペットを吹いている。これはマタイの力強い声を表しているという。カーテンの陰から、顎鬚のある男が本を片手にこちらを覗いている。これが誰かははっきりしないが、ある説では、これはキリスト自身で、福音書を書くマタイを励ましているところ、カーテンは至聖所の幕を表すのではないかといわれている。

（近川澄子『写本遍歴の旅』リトン 2000 より引用・抜粋）

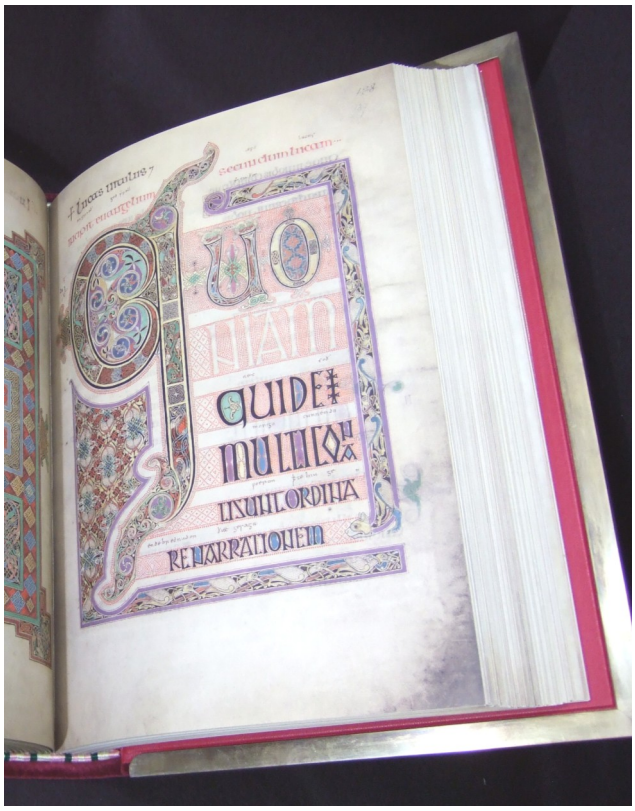
The Lindisfarne Gospels

ルカによる福音書のクロスカーペット頁

各福音書の初めには、それぞれに十字架をモチーフにした独自のカーペット頁が入っている。ルカのカーペット頁には、中央の正方形の中の四つの渦巻き、十字架の腕木を埋める繊細なリボン・インターレース、四つの長方形の中の鳥と組紐の絡み合う連続模様など、ケルト・アングロサクソン起源の写本の特徴を明らかに示している。これは次に始まる福音書のテキストに信者を導く一種の扉であるとも言われている。

ルカによる福音書の冒頭のイニシャル頁

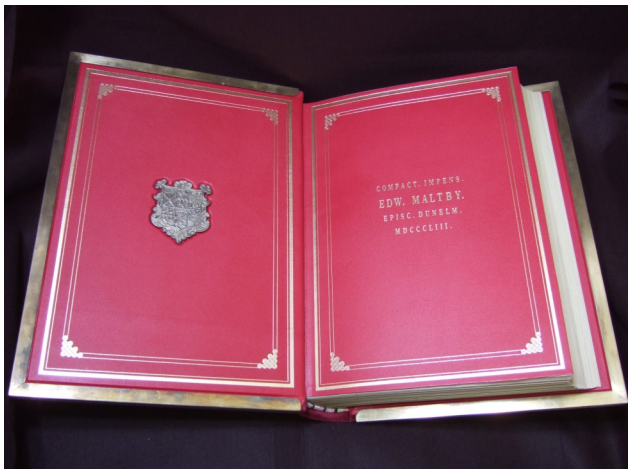
ルカによる福音書の最初に置かれたイニシャル頁。大文字‘q’の中は大小の渦巻きで埋められ、デザインも装飾も大胆でしかも繊細、その感覚は近代的とさえいえる。右側の縁飾りの一番下に、猫の頭と前足が見え、それはすぐ下に並んでいる鳥の群れを睨んでいるかのようである。この猫の後足と尾は、右の縁飾りを遡り一番上の左端に描かれている。そんなところにこの画家の遊び心が見てとれて楽しい。



（近川澄子『写本遍歴の旅』リトン 2000 より引用・抜粋）

聖マルコの肖像とその象徴ライオン

リンディスファーン福音書<装丁>



リンディスファーン福音書<見開き1頁目>